

大阪市

今すぐ 拉致被害者 全員の帰国を!



▲横田めぐみさん、哲也さん、拓也さん

拉致被害者ご家族等の声を
知ってください、伝えてください

飯塚耕一郎さん

(田口八重子さんの長男)

北朝鮮で助けを待っている方も、彼らを救うために頑張っている我々家族も時間がありません。全員の帰国だけを頑なに主張せず、段階的に進めるべきと言う人もいますが、我々家族会は一日も早い全ての被害者の帰国を求めています。

福山はるみさん

(福山ちあきさんの母)

娘が失踪した当初は、警察を恨んだり、自分を責めたりしました。拉致の可能性があると知った後は、矛盾していますが、生死も分からず行方不明であるより、拉致されて北朝鮮で生きていると思いたい。まだ、娘は特定失踪者という段階で、認定を受けたわけではありません。せめて向こうで生きているということを教えてほしい。

はじめ

松本孟さん(松本京子さんの兄)

拉致問題について見聞きした時、その場で終わりではなく、もう少し学んだり、他の人に広げていただきたい。

特定失踪者問題調査会 村尾建児さん

ある程度の年齢の方は関心を持っておられますが、あまりにも世代間のギャップが大きく、次の世代がしっかりとこの問題を認識して動いていかなければなりません。

取り戻す ための 「ブルーリボン」

ブルーの色は、日本と北朝鮮を
へだてる「日本海の青」、そして
被害者と家族を結ぶ「青い空」
をイメージしています。

増元照明さん(増元るみ子さんの弟)

ブルーリボン運動を普及させ、日本中でこのブルーリボンをつけている方が8割いっしょなら、北朝鮮も無視できなくなり、大きな流れを作ることができると信じています。

「空と海の向こう」に託した思い

あやき

山口采希さん

(シンガーソングライター)

私はこの問題を、一人の人間として、みんなに共通している大切な問題だと思っています。私たち若者も声をあげていく、絶対にあきらめない強い思いを抱き、この曲を歌わなくてもいい日を願って歌っていきたいと思います。

横田拓也さん(横田めぐみさんの弟)

2002年に5人の方が帰国できましたが、姉を始めとする多くの被害者たちは死んでいると仕分され今も帰国できていません。政府、国際社会を動かし、全被害者が帰国し家族と再会できるように、家庭や職場で話していただき理解を広げていただきたい。

横田哲也さん(横田めぐみさんの弟)

拉致問題の解決は「日本人が自由や正義がどれだけ大切なものであるか」を認識し続けられるかと思っています。誰かがやってくれるだろうではなく、一緒に戦っていただきたいと思っています。

特定失踪者家族会 藤田隆司さん

特定失踪者の存在を知ってもらいたい。警察が発表している883人は拉致の可能性が高く「知られざる拉致被害者」と考えています。拉致問題の多くは未解決で今も続いています。

拉致被害者の帰国を願う歌

BOROさん

(シンガーソングライター)

拉致被害者の帰国を願って作った歌「春夏秋冬抱きしめて」。その歌に込めた思いが大空を飛び越えて、北朝鮮にいる皆さんに届きますように!!一日も早い帰国を願っています。

拉致問題とは

1970年代から1980年代にかけて、多くの日本人が不自然な形で行方不明となる事件が発生し、これらの事件の多くは北朝鮮による拉致の疑いが濃厚であることが明らかになりました。北朝鮮側は頑なに否定しつづけてきましたが、平成14年9月の日朝首脳会談において、当時の金正日総書記が横田めぐみさんら日本人の拉致を初めて認め、謝罪しました。その後、5人の拉致被害者とその家族が帰国することができましたが、その他の人の安否については納得のいく説明がありません。

北朝鮮が拉致を行った背景には、工作員による日本人への身分の偽装、工作員を日本人に仕立てるための教育係としての利用、といった理由があったとみられます。政府はこれまでに17名を北朝鮮当局による拉致被害者として認定していますが、このほかにも拉致の可能性を排除できない者がいるとの認識の下、所要の捜査・調査が進められています。

拉致被害者家族の高齢化が進んでいます。すべての拉致被害者の一刻も早い帰国が望まれています。

北朝鮮による拉致の可能性を排除できない事案

政府が認定する「拉致被害者」(17名)のほかに、拉致の可能性が排除できない「特定失踪者」と呼ばれる人たちがいます。

現在、認定拉致被害者を含め、全国の警察本部と民間の「特定失踪者問題調査会(荒木和博代表)」は、拉致の可能性を排除できない失踪者の数を約900人と発表しています。また、拉致被害者は、日本海側の都道府県出身者が多いイメージがありますが、特定失踪者を含めると全国に存在し、しかも、東京、北海道、大阪が中心です。失踪した時期は、昭和52(1977)年をピークとして約60年間にも及んでいます。

2002年10月に帰国された曽我ひとみさんは、これまで拉致被害者として名前が挙がらず、家族や警察さえも、単なる行方不明だと認識されていた方でした。それがわかった直後から「うちの家族も拉致されたのではないか」という申し出が警察などに殺到し、多くの特定失踪者の存在が明らかになったのです。

特定失踪者家族会は、認定拉致被害者に比べ認知度が低い「特定失踪者」の存在を内外に広めることで、北朝鮮への圧力をより強め、すべての拉致被害者の救出をめざして活動しています。

拉致問題の解決のために

解決への動きを進めるためには、国民の思いを一つにし、拉致被害者を帰国させるという強い思いを北朝鮮や国際社会に発信していかなければなりません。拉致問題によって新たな差別や偏見を生み出すことのないよう正しく理解し、一人でも多くの人がこの問題を正しく学び、興味関心を持ち続けることが必要です。

詳しくはホームページにて

行政

大阪市
拉致問題の
ホームページ



政府
拉致問題対策本部の
ホームページ



大阪府
拉致問題の
ホームページ



民間

大阪
ブルーリボンの会



特定失踪者問題
調査会



救う会全国協議会

